

受験番号

氏名

生年月日

禁無断転載

解答は、すべて答案用紙に記入して必ず提出してください。

1 級 一 II

2022 年 度 第 162 回 簿 記 検 定 試 験 問 題 用 紙

工 業 簿 記 ・ 原 価 計 算

(商業簿記・会計学終了、休憩後開始 制限時間 1 時間30分)

(2022年11月20日(日) 施行)

日 本 商 工 会 議 所
各 地 商 工 会 議 所

受験者への注意事項

1. 問題用紙・答案用紙・計算用紙は、持ち帰りできませんので全て必ず提出してください。持ち帰った場合は失格となり、以後の受験をお断りする場合があります。
2. 答えは、問題文の指示に従い定められたところに、誤字・脱字のないよう、ていねいに書いてください。
3. 答案の記入にあたっては、黒鉛筆または黒シャープペンシルを使用してください。

※営利目的での使用は禁止します

工業簿記

問題 (25点)

N社は製品Xと製品Yを製造販売している。工場には2つの製造部門（A製造部門、B製造部門）と3つの補助部門（材料倉庫部、生産技術部、工場管理部）がある。

原価計算の方法としては部門別計算を行い、補助部門費の配賦（部門費の第2次集計）は直接作業時間を配賦基準とした直接配賦法を採用している。各製造部門製造間接費の製品への配賦は、直接労務費を配賦基準としている。次の【資料I】にもとづき、下記の問に答えなさい。

【資料I】

1. 当期の部門別製造費用予算

(単位：千円)

	A 製造部門	B 製造部門	材料倉庫部	生産技術部	工場管理部
製造直接費					
直接材料費	25,000	14,400	—	—	—
直接労務費	4,875	2,378	—	—	—
製造間接費	1,276.8	1,220.2	1,856	1,740	1,160

2. 当期の製品別計画生産販売数量、単位当たり予定直接材料費と予定直接作業時間

	製品X	製品Y
予定生産販売数量	6,000 個	500 個
単位当たり直接材料費	6,400 円／個	2,000 円／個
A製造部門単位当たり直接作業時間	0.6 時間／個	0.3 時間／個
B製造部門単位当たり直接作業時間	0.3 時間／個	0.5 時間／個

注) 直接作業時間には段取作業時間は含まれていない。

3. 計算条件

- ① 配賦率が割り切れない場合、計算の途中ではなく最終段階（たとえば問2では製品Xと製品Yへの製造間接費配賦額を答える段階）で小数点以下第4位（円未満）を四捨五入すること。
- ② 製品単位当たり製造原価は、割り切れない場合、円未満を四捨五入すること。

問1 補助部門費配賦後のA製造部門製造間接費とB製造部門製造間接費を求めなさい。

問2 製品Xと製品Yへの製造間接費配賦額を求めなさい。

問3 製品Xと製品Yの製造直接費を求めなさい。

問4 製品Xと製品Yの単位当たり製造原価を求めなさい。

N社はコスト・プラスの価格設定方式を採用している。各製品の単位当たり製造原価にマージンを加えて、製品Xを10,820円、製品Yを4,925円で販売しようとしたがライバル会社の製品価格と比べたところ、当社の製品Yの価格が非常に安いことがわかった。そのため社長は、コスト・プラス方式のコスト、すなわち製品単位当たり製造原価のうち製造間接費の配賦額に疑問を抱き、原価計算担当者に活動基準原価計算を用いた場合の製品別単位当たり製造原価の計算を命じた。次の【資料Ⅱ】にもとづき、下記の問に答えなさい。なお、製品Xと製品Yの予定生産販売数量は【資料Ⅰ】2.と等しい。

【資料Ⅱ】

1. 製造間接費のコスト・プール

製造部門における間接作業と補助部門における業務活動の分析をしたところ、製造間接費は次の6つのコスト・プールに分けられることがわかった。

(単位：千円)

コスト・プール	製造間接費
機械作業活動	1,803
段取活動	1,040
工程改善活動	1,400
購入部品の発注・検収活動	970
材料の払出・運搬活動	880
管理活動	1,160
合 計	※ 7,253

※【資料Ⅰ】1. 部門別製造間接費合計と等しい

2. 製品別のコスト・ドライバー

コスト・ドライバーを調べた結果、次の通りになることが推定された。なお、管理活動コスト・プールには適切な基準がないので、直接作業時間を配賦基準とする。?は各自計算すること。

	製品X	製品Y
機械運転時間	2,506 時間	1,100 時間
段取時間	80 時間	50 時間
工程設計時間	60 時間	40 時間
購入部品の発注回数	71 回	26 回
材料運搬回数	52 回	36 回
直接作業時間	?	?

3. 計算条件

- ① 配賦率が割り切れない場合、計算の途中ではなく最終段階で小数点以下第4位（円未満）を四捨五入すること。
- ② 製品単位当たり製造原価は、割り切れない場合、円未満を四捨五入すること。

問5 製品Xと製品Yへの製造間接費配賦額を求めなさい。

問6 製品Xと製品Yの単位当たり製造原価を求めなさい。なお、製造直接費は問3と同額である。

原 価 計 算**問題 (25点)****第1問**

次の文章のアからキまでの（ ）の中に適切な言葉をいれなさい。クは、「高」か「低」のいずれか適切な方を○で囲みなさい。

- (1) 総合原価計算において完成品換算量とは、完成品と仕掛品の価値の違いを、（ ア ）の違いに置きかえて互いに価値の異なる完成品と仕掛品を統一的に扱うことができるようにするものである。
- (2) 製造間接費は（ イ ）とよばれる代理変数によって製品との関係づけを行うことができる。（ イ ）の代表的な例に直接作業時間がある。
- (3) （ ウ ）は、製品量産体制以前の源流管理といえる。すなわち、製品の企画・設計段階における原価の作り込み活動である。
- (4) 投資案には独立投資案と従属投資案があるが、（ エ ）投資案の場合には内部利益率法をとっても、（ オ ）法をとっても、採用すべきかどうかは同じ結論になる。
- (5) 何%売上高が落ち込んだら損失が生じるかを示す指標を（ カ ）率という。
- (6) 固定費に変化がない場合、貢献利益率が40%から50%に上がると、貢献利益率40%の場合に比較して、損益分岐点の売上高は（ キ ）%（ ク ）くなる。

第2問

当社は製品Xを製造販売している。製品Xの販売単価は700円である。いままで製品Xは、材料xを使用して製造されていた。材料xの単価は、100円である。その歩留まりは50%である。製品Xを100個製造するのに200個の材料xの投入が必要である。なお、材料xを使用した場合、製品Xを10個製造するのに機械作業時間10分を要する。なお、機械は1台だけである。1日の機械稼働可能時間が450分である。

最近、材料yが開発された。その材料を使用すると、歩留まりは80%に向上する。すなわち製品X 100個を製造するのに125個の材料yの投入が必要である。材料yの単価は、200円である。なお、材料yを使用した場合、製品Xを10個製造するのに機械作業時間5分を要する。機械は、材料xのときと同じ機械を使用することができる。

製品Xは非常に需要が高く、作れば作るだけ販売することができるので、常に生産能力いっぱいまで使って製造を行っている。これは材料xを使う場合でも材料yを使う場合でも同様である。

なお、税金は考慮する必要はない。

問1 材料xのみを使用した場合、製品Xは1日に何個作ることができるか。

問2 材料yのみを使用した場合、製品Xは1日に何個作ることができるか。

問3 製品Xを製造販売するとき材料xを使用する場合に比べて、材料yを使用すると、1日あたりいくら有利か、あるいは不利か。

問4 1個100円で購入した材料xの在庫が大量に残っている。材料xは、製品Xの製造をしない場合、1個あたり30円で売却する以外に利用法がない。材料yが利用可能になってからあとに、材料xを利用して製品X 100個を製造することの機会原価を計算しなさい。

問5 問4の状況で、材料yが利用可能になってからあとに、在庫されている材料xを利用して製品X 100個を製造することは、材料yを利用することに比べて、いくら有利か、あるいは不利か。